このいのちを生きて ―病とともに歩む道―

海谷則之

はじめに

桜の季節になると、平成十年に受けた食道がん手術のことを想い出します。がんのことは早く忘れたいとか、忘れようとかいうのではなくて、かえって〝癌〟は病と生きる意味について本気で考える契機となりました。その年の秋には、転移した両肺への抗がん剤治療を受けていました。〈もしかして年を越せないかも…〉との思いがあり、年末には『癌もご縁でした』（本願寺出版社）をやっとの思いで出版することができました。現在、いくつかの後遺症はありますが、おかげさまで充実した生活を送っております。

「一寸先は闇」といいますが、その闇の向こうにこそ、「光」のお浄土があると信じて毎日を過ごさせていただいています。病のきびしい現実をどのように乗り越えていったらよいのか。病に対しては回復の希望をもって対処していかなければなりませんが、しかし時には回復が見込めないこともあります。そうした絶望的な状況に陥っても、なお一日一日を幸せに生きる道はないのか。そのことをいつも考えてきました。

それは病に随って生きる「随病」という生き方であり、つらい病の身ではあってもけっして自分自身を失わず、病から学びながら前向きに生きることでした。言い換えると、大慈大悲のいのちに身をゆだねる生き方でした。

たまに、「その後、体の調子はいかがですか」と聞かれることがあります。そんなとき、がんのことを覚えていてくださって、ありがたく思います。どんなに嫌な病であっても、これも〝ご縁〟だと思えば、どこまでも付き合っていくしかありません。

平成二十七年四月、グループサウンズ、ザ・ワイルドワンズのリーダー加

瀬邦彦さんが自宅で自死されたと報じられました。七十四歳でした。くしくもこの日は、かれに大きな影響を与えたビートルズの元メンバー、ポール・マッカートニーの日本公演初日だったのです。加瀬さんが作曲した「想い出の渚」は学生時代から大好きな曲でした。じつはかれは、わたしの食道がんの手術より四年前の、平成六年に同じ食道がんの手術をしていたのです。がんは完治し、これまで作曲とステージ演奏に精力的に活躍されていました。じゅうぶん健康管理につとめておられたのでしょうが、平成二十六年三月、下咽頭がんの手術をされ、自宅療養中だったようです。声を失ってどんなにか苦しまれたことと思います。かれのがんの再発はけっして他人事ではなく、あらためてがんの恐ろしさを痛感したことでした。

二十年生き延びることができたら続編を書いてみたいと考えていましたが、月刊「大乗」誌の「病に生きる」欄に、平成二十六年の五月号から十三回にわたって連載する機会をいただき、不思議なご縁を感じています。出版に当たり、「大乗」誌の本文を多少加筆訂正して出版することになりました。文中で言葉足らずやご無礼になったところは、どうかご寛恕たまわりたく存じます。

なお、同誌の「読者のひろば」ではうれしいコメントも寄せていただき、誠にありがとうございました。

平成二十八（二〇一六）年十月

著者

目次

はじめに……2

第一章　**支えあって生きる**……9

支えあう〝いのち〟……10

病む者の悲しみと願い……15

前向きに生きている患者たち……20

第二章　**病とともに生きる**……25

病によって得たもの……26

もう少し生きたい……32

病に随って生きる……37

第三章　**いのちを慈しむ**……43

いのち愛しみて……44

〝おかげさま〟のど真ん中……51

癌もご縁でした……56

第四章　**病を越える道**……63

〝いのち〟をいただく――医食同源……64

ふれあいを大切に……69

ああ、もったいなし　もったいなし……75

病むことも無駄ならず……86

第一章　支えあって生きる

草津温泉の「湯畑」

支えあう〝いのち〟

わたしは学生時代、本願寺中央日曜学校の教師（指導者）をしていました。昭和四十年秋に、本願寺会館（現龍谷ミュージアムの場所）の大ホールで第五十回報恩講児童大会を開催しましたが、平成二十六年には百周年記念大会に参加させてもらい、歴史の重みを感じるとともに、先輩、後輩の方がたともお会いできて、楽しい時間を過ごさせていただきました。

当時の仲間の一人に故・戸須智淳氏がいました。

かれは平成十三年三月、五十四歳で亡くなりました。龍谷大学大学院修士課程を修了後、自坊（福岡県田川市・友末寺）にもどって積極的に布教活動をしていました。昭和五十四年には住職となり、本堂や庫裡、納骨堂の修復をしました。後でわかったことですが、体調をくずし平成二年に咽頭がんの手術をしていたのです。

わたしが食道がんの手術をした翌年の正月に、かれから年賀状を頂戴しました。

それは、いつもの内容と少しちがったものでした。一月四日付けの年賀状には、前年十一月にお嬢さんが嫁がれ、年末にはご母堂が心筋梗塞で急死されたことが記されていました。

母は七十九歳で、如来様の待たれている倶会一処のお浄土にかえりました。昨日（一月三日）初七日の法要を勤め、年末年始と悲喜こもごもな毎日を送りました。あらためて、お念仏の機会を頂きました。今年もよろしくご指導をお願い致します。合掌

とありました。そして、余白にペンで、

先日、母のいとこに当たる方から、食道がんの手術を受けられたことを聞きました。いかがですか？　わたしは声帯は半分のこり、いくらか話せます。お気をつけてください。智淳

と書き添えてありました。

そのときは、「声帯は半分のこり」という意味がよくわかりませんでした。

それから三日ほど経った夜のこと、かれから突然、電話がありました。二十七、八年ぶりに聞く懐かしい声でした。そのとき初めて咽頭がん手術のことを知り、声帯のことがわかったのです。

かれによると、近くで話せば辛うじて気持ちを伝えることはできるけれど

も、唾を呑み込むことができないので、ハンカチかティッシュで拭き取らなければならないとのことでした。そして、手術前に主治医から術後は声が出なくなるだろうと聞かされていたから、テープに必要なお経と『御文章』などを録音しておき、それを持ってご門徒の家にお参りしているとのこと。こんなにたいへんなご苦労をなさっていることに、驚愕いたしました。電話には拡声器がついているので、何とか話ができるとのことでした。最後に、「先輩も頑張ってください！」とつよく励ましてくれたのです。この言葉にわたしはこれまでどれほど支えられてきたことでしょう。じつはこれがかれとの最後の会話になりました。

かれは、咽頭がんから十年経った平成十二年六月、今度は食道がんを発症し、その後肺がんから脳への転移となり、平成十三年三月九日に往生したのです。春彼岸が終わった二十八日に、お寺で葬儀が執り行われました。その遺影